

分布：全国

セイタカアワダチソウ（キク科）

ソリダゴ アルティシマ
学名：*Solidago altissima*

背高泡立草 別名：アワダチソウ、オウゴンソウ、セイタカアキノキリンソウ、 代萩

主な生育場所

荒地、休耕地、田畑の畦、樹園地、道ばた、河川敷、土手、草地などのやや乾き気味の日当たりの良い場所を好んで群落を形成する。定着後の一時的な湛水に耐えるため時に湿地でも見られる。

特徴

種子もつけるが地下茎で増える北米原産の多年生。直立する茎は2.5mにも達し、茎と葉には固い短毛が密生する。3本の葉脈が目立つ葉は互生し葉縁には低い鋸歯がでる。10-11月に茎の上部に多数の直径5mmほどの黄色い頭状花を穂状につけた多数の横枝を伸ばし円錐花序となる。冠毛付きの1mmの種子は風散布される。



名前の由来：在来種のアキノキリンソウ(別名：アワダチソウ)の草高が50~80cm程度に対し、1~2m以上と高くなることから。また黄色の頭花を泡のようにたくさん付けることから泡立ち草。

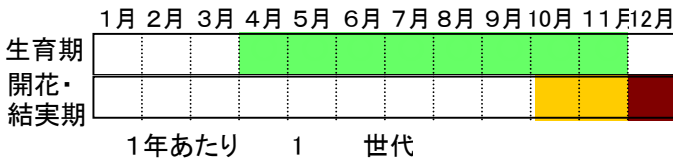
<農業との関係>

草高が2m以上と高く、地下茎で増え群生することから耕作放棄地や休耕地などで目立つが、耕起や湛水には弱いためほ場内で問題となることは少ない。樹園地や不耕起ほ場で発生が多くなることがあるが、刈りとりやすいため、こまめの刈り払いで対処できる。刈り払い回数の少ない畦畔やほ場へのアプローチ道路など非農耕地で繁茂すると視認性や農作業の効率に支障が出ることがある。



荒地地に形成された群落

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> 北海道などでセイタカアワダチソウよりも多く見られるオオアワダチソウの花期は初夏から夏にかけてと早く、茎や葉は無毛でざらつかない。在来種のアキノキリンソウの草高は約50cmと低いが、頭状花の直径は約12mmと大きく、花序は穂状。

<一言うちく>

戦後、各地に急速に拡がり、かつては花粉症の原因とされましたが、セイタカアワダチソウは虫媒花のため、花粉が風で拡散することは少なく、すっかり濡れ衣を着せさせられていました。しかし、他の植物の生育を抑える物質を根から出すため、在来種の植生には大きな影響を与えています。



在来種のアキノキリンソウ

<人との関わり合い>

中高年以上の世代には見慣れない植物が急激に増えたイメージから「嫌われ者」の印象も強いが、若い世代には秋の風物詩として群生する花が景観として馴染んできているようだ。原産地のアメリカでは州花と扱われることも。また養蜂にとっては蜜源植物としても優秀。食用にもなり、新芽や花は天ぷらにすると独特の風味があり美味しい。またセイタカアワダチソウを含むSolidago属にはポリフェノール類が多く、利尿や炎症抑制作用がある。民間薬として皮膚炎などにも効用があるとされる。

<俳句や短歌への登場>

【季語：秋】 ※背高泡立草を縮めて「泡立草」と詠むことが多い。

よく笑う女背高泡立草(増田栄子) どこまでも雨の背高泡立草(小西昭夫) 墓山の泡立草の強気かな(福谷俊子)
忘れみし空地黄となす泡立草(山口波津女) 沼を吹く風を黄色に泡立草(和知喜八)
湖西線背高泡立草に延び(京極紀陽) 沿線の三角空地を輝やかに泡立草の黄はうづめたり(田谷 鋭)